

字のない恋文



字のない恋文

芳流 (kaoru)

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17659165>

ダイの大冒険, ヒュンマ, マァム, レイラ, ロカ, ヒュンケル, 子マァム, 勇者アバンと
獄炎の魔王

5/23は、恋文 & KISSの日ということで、突発的に書いたもの。

後半ちょっと駆け足ですみません・・・。

1 ページ目は、幼少期。2 ページ目が原作後。

色っぽいキスシーンはありません💧

1 ページ目が「あるべき未来に進むために」7 novel/15406332とつながっており、2 ページ目が「天使におくるメッセージ」

novel/16452811に関連している話です。

どこに置こうかと迷いましたがこちらに。

Table of Contents

- [字のない恋文](#)

字のない恋文

昼食後のひととき、レイラは、手紙を書こうと思って、羽ペンとインク壺、それに紙を取り出して、テーブルの上に並べた。

レイラが、慣れた手つきで、紙に文章をしたためていると、テーブルの上に、ひょっこりと小さな頭が顔を出した。

「かーたん、なにしてゆ？」

3歳の娘、マァムが、椅子の上に乗って、レイラの手元をのぞき込んでいた。

レイラは、急いでインク壺を手元に引き寄せ、マァムにひっくり返されないようにした。

一安心したところで、レイラはマァムに微笑んだ。

「お手紙を書いているのよ。」

「おてまみ？」

舌足らずな声で、マァムが聞き返した。

レイラはうなずいた。

「そう。」

この前ね、遠くの教会の神父様に、薬草の種をいただいたのよ。

そのお礼のお手紙を書いているの。」

だが、幼いマァムには、レイラの話す内容は難しかったようで、首をかしげていた。

マァムは、再度、レイラに尋ねた。

「おてまみ、なに？」

「お手紙、だぞ、マァム。」

近くで聞いていた父親の口力が口をはさんだ。マァムも言い直す。

「おてまみ。」

だが、やはり正確には発音できなかった。まだ3歳の彼女は、幼児言葉でしか語れなかったのだった。

レイラが、マァムに言葉をかけた。

「マァム、お手紙っていうのはね、遠くの人に、言葉や気持ちを伝えるものよ。こうして、字で書くのよ。」

「ふーん。」

マームは、レイラの手元と、母の顔を見比べながら感心したような声を上げた。

やがて、彼女は、ぱっと笑みを浮かべると、勢いよく声を上げた。

「マームもかくー！」

「おいおい、まだマームは字が書けないだろ？」

ロカがそう言うと、マームは風船のように膨れて怒った。

「かーくーのー！」

「はいはい。」

レイラは、マームの前に、紙と、黒鉛の棒を出した。簡易な鉛筆だ。

マームは、きらきらと目を輝かせ、黒鉛棒を握りしめると、思い切り、紙に大きく書き殴った。

その実に楽しそうな様子に、ロカは、マームの手元をのぞき込んだ。何を書いているのか、不思議だったのだ。

ロカは、苦笑した。

「おいおい、マーム、何を書いているんだ？」

「ぐるぐるー！」

マームは、大きな紙いっぱい、何重にも渦巻きを書いていた。まだそれしか書けないのだ。

レイラも苦笑したが、拳で黒鉛棒を握りしめ、楽しそうに渦巻きを書いているマームを見ると、微笑ましくなった。

「あら、マーム、よく書けたわね。」

すると、ロカもうなずいた。

「うんうん、立派な渦巻きだな。」

すると、マームは気をよくしたのか、ますます笑みを浮かべた。

「マーム、じょうじゅー！」

上手だと言って、自画自賛をしている。

「マーム、それは誰へのお手紙？」

すると、マームは、一瞬きょとんとしたが、またすぐに笑顔になった。

「とーたん！」

マァムは、黒鉛で真っ黒になった手のまま、大きな渦巻きを書いた紙を持って、椅子から飛び降りた。

そして、口力に駆け寄った。

「とーたん、はい！おてまみ！」

「ありがとなー、マァム！」

口力は、マァムからの手紙を受け取ると、マァムを片手で抱き上げた。

すると、マァムは、口力の頬に唇を寄せて、そっとキスをした。

とたんに、口力の顔がゆるむ。

「マァムー！お前はもう・・・なんてかわいいんだー！」

マァムを左腕１本で抱き上げたまま、口力がマァムの体をゆすつてやると、マァムもきゃあきゃあ言って喜んだ。

マァムは口力の腕から下りてくると、また椅子の上に乗った。

「かーたん、もっと。」

「はいはい。」

マァムの求めに応じて、レイラはまた紙を出した。

すると、マァムは、同じように、黒鉛棒で、ぐるぐると大きな渦巻きをいくつも書いた。

そして、気が済むまで書くと、椅子から飛び降り、今度はレイラに駆け寄った。

「かーたん、おてまみ。」

「あら、ありがとう、マァム。」

そして、レイラがかがみこむと、マァムは、父にしたのと同じように、母の頬にキスをした。

レイラは、くすぐったそうに微笑んだ。

マァムはまた椅子に飛び乗ると、３枚目の紙にも同じように何やら書き殴っていた。

両親にはもう手紙を書いたのに、なおも、同じように、どうやらお手紙らしきものを書いている娘を、口力は不思議そうに眺めていた。

「マァム、それもお手紙か？」

「うん！」

マァムが力強く返事をする。

そうしている間にも、彼女は顔を上げることはなく、楽しそうに、渦巻きをいくつも紙の上に書いていた。

愛娘の有り様を微笑ましく思いながら、口力は笑みを浮かべて彼女に尋ねた。

「誰へのお手紙なんだ？おじいちゃんか？」

「あのねー、にいに！」

意表をついたその答えに、たちどころに口力の顔が曇った。

対照的に、レイラは笑顔を浮かべている。

レイラは、娘に話しかけた。

「マァム、にいににお手紙出すの？」

「うん！」

マァムに兄はいない。

その彼女が「にいに」と呼ぶのはひとりだけだ。

つい先日、アバンとともにこのネイル村を訪れた、彼の弟子の少年だった。

口力は、いらだちを隠せないまま、呟いた。

「・・・あのガキ。」

だが、マァムは、笑顔のまま、黒鉛棒を置くと、彼女の書き上げたお手紙を両手で掲げて誇らしげに言った。

「できたー！」

「あら、上手に書けたわね。」

母に褒められて、マァムはますます気をよくした。

「あのね、にいにに、おてまみわたして、ちゅーするの。」

すると、とたんに口力が口をはさんだ。

「駄目だっ！マァム、いいか、お前がキスしていい男は、父さんだけだ！ヒュンケルはダメだっ！！」

「えー、にいににもちゅーするー。」

マァムは口をとがらせて不満気だ。

その父娘のやり取りを、レイラはおかしそうに眺めていた。

レイラは、マァムに声をかけた。

「マァム、今度、先生とにいにが来たら渡しましょうね。」

このお手紙は、それまで母さんが預かっているわね。」

「うんっ！！」

マァムは勢い良くうなずいた。

レイラは愛娘に微笑むと、彼女が初めて書き上げたラブレターをそっと折りたたんだ。

玄関の扉をノックする音に気が付き、レイラはそのドアを開け、客人を招き入れた。

扉の外には、彼女の思ったとおりの人物が佇んでいた。

レイラは笑顔で彼を出迎えた。

「いらっしゃい、ヒュンケル。そろそろ来ると思っていたわ。」

対するヒュンケルは、恐縮した様子で、軽く頭を下げた。

「毎日、すみません。レイラさん。」

「どうぞ、入って。」

レイラは、ヒュンケルを自宅に招き入れると、リビングに座らせた。そして、ここ数日と同じように、奥の部屋から何冊もの医学書を持ってヒュンケルの前に出した。

「はい。」

こっちが昨日途中まで読んでたものね。

これは新しい本。」

「ありがとうございます。」

ヒュンケルは、レイラに出された医学書を開くと、昨日しおりを挟んだところから読み始めた。

レイラは台所に行き、かまどの火にかけたままの鍋を下ろした。鍋の湯をポットに注ぎ、ヒュンケルに出すお茶を用意した。

香りのよいハーブティーを入れると、レイラはヒュンケルの前にカップを置いた。

「はい、どうぞ。」

「いつもありがとうございます。」

「わからないところがあったら聞いて。」

「はい。」

レイラは、ネイル村で医業を引き受けているので、彼女の自宅には医学書が何冊もあった。専門的な本ばかりなので、初心者が読むには難解だとレイラは思っていた。

そのため、ヒュンケルにも、わからないところがあったら聞くよ

うに声を掛けていたが、どうやら、余計な配慮だったらしい。

ヒュンケルは難なく、専門書を読み進めていた。聞けば、魔界で、ある程度の学問を修めているそうだ。

もっとも、ヒュンケルがこうして、わざわざレイラのところまで医学書を読みに来ているのは、なにも医者を務めようとしてのことではなかった。

レイラは、ヒュンケルに声を掛けた。

「理解が進んだかしら？」

「はい。」

「そうやって、知識を得ようとしてくれるのはありがたいわ。でもね、ヒュンケル、難しく考えないでね。この村の男性でも、女性の体や妊娠、出産のことはほとんど知らないっていう人が多いのよ。」

「ええ。ただ、村の人は、経験で、身近な女性の妊娠、出産を見てきていると思います。俺には、全くそんな経験もない。知識で埋めていく方が楽だと思いました。」

何も知らないのでは、マァムに申し訳がありません。」

「そう言ってくれるのは、嬉しいわ。」

愛妻の体を気遣う様子のヒュンケルに、レイラは嬉し気に微笑んだ。

マァムに子どもを授かったと気付いたのは、つい1か月前のこと。

ヒュンケルは、この慶事を喜んだものの、それまで、全く経験のなかったこの事態に、彼は大いに戸惑った。そして、何とか知識をつけようと思ったのだろう。このところ、村の仕事が終わると、彼はレイラの元を尋ねて、医学書を読み漁っていた。

ヒュンケルは、この日もいつものように、レイラに用意してもらった専門書を読み進めていた。

そのとき、ふと、彼は、ページの間隙に挟まれている紙片を見つけた。

その紙片は、4つに折りたたまれ、端の方は黄ばんでいた。

開いて中を見てみたが、彼には全く理解ができなかった。

ヒュンケルは、レイラに尋ねた。

「レイラさん、これは？挟まっていました。」

そう言って、レイラに紙片を手渡した。

レイラも始めは不思議そうにしていたが、その紙片を開くと、とたんに笑顔になった。

「ああ！これ！

こんなところにあったのね・・・。」

そう言って、レイラは、嬉しそうにその紙片に視線を落とした。

ヒュンケルは、不思議そうにレイラに視線を送っていた。

すると、ヒュンケルの視線に気付いたレイラが、彼を見上げた。

「これは、貴方のものね。」

「え？」

ますます意味が分からず、ヒュンケルは戸惑った。

レイラは言葉をつづけた。

「これは、マァムが貴方に書いた手紙よ。あの頃のマァムはまだ小さくて、字が書けなかったから、こんな風にぐるぐるって渦巻しか書いてないけどね。

貴方とアバン様がこの村を出て、1か月、2か月くらい経った頃だったかしらね。

にいに渡すんだ、って言って書いてたわ。」

ヒュンケルは、戸惑った声のまま、言葉を返した。

「・・・俺に？」

レイラはうなずいた。

「しまい込んで、どこに行ったかと思ってたけど、見つけてもらってよかったわ。」

そう言って、レイラは、その紙片をもとのように4つ折りにすると、ヒュンケルに差し出した。

「貴方に渡すまで私が預かってるって、マァムに約束してたのよ。

よかった。見つかって。

はい、どうぞ、ヒュンケル。

マァムから貴方への、最初のラブレターよ。」

ヒュンケルは、驚きを隠せない表情のまま、レイラからその紙片を受け取ると、そこに視線を落とした。

そんな彼に、懐かしむように、レイラが言葉をかけた。

「あの頃のママムは、貴方のことが大好きだったものね。にいに、って言って、よく後をついて行ってたわね。」

ヒュンケルは、レイラの言葉を聞きながら、幼いママムからの時を超えて届いた手紙を見つめていた。

その紙片の裏に、まだ小さかったあの頃の彼女の姿が蘇った。

—にいに、だーいしゅき！

愛おしさに、目頭が熱くなる。

少年だったあの日の自分が、同じように、この手紙を見つめていたようであった。

ヒュンケルは、心の中でつぶやいた。

—・・・俺は、あの頃から、お前に心奪われていたんだな・・・。

そうして、ヒュンケルは懐かし気に微笑むと、ちいさなママムからの恋文に唇を寄せた。

少年だった彼が、あの頃のママムの頬にキスをするように、そっと。

幼い日の思い出に寄り添いながら。